

# 百人一首かるたの研究(4)

吉 海 直 人

【要旨】これまで「百人一首かるたの研究」として三回に亘って資料を提供してきた。今回はその補遺を兼ねて、新しく探し出したいくつかのかるた資料を提示したい。

## ①近松門左衛門と百人一首

——『<sup>かまよ</sup>娥歌かるた』を中心に——

—

元禄頃に版彩色のかるたが出回るようになった際、それに連動するかのよう歌かるたのことが文献に出てきています。たとえば平田澄子氏は、近松の作品の中に百人一首撰取が認められることについて、

近松が浄瑠璃制作の際明らかに『小倉百人一首』を意識し

ていたと認められる作品に、『天智天皇』（元禄初期）、『せみ丸』（元禄二一七）、『娥歌かるた』（正徳四）、『持統天皇歌軍法』（正徳五）などがある。

（『近松浄瑠璃の成立と展開』257頁）

と指摘しています。

その内の『<sup>かまよ</sup>娥歌かるた』には、書名が示す通りかるた取りの場が描かれており、百人一首の享受資料としても非常に有益です。これに関してかつて『百人一首かるたの世界』（新典社新書）の「読み手の出現」で部分的に引用・紹介していますが、ここでは資料の提供ということを踏まえて、もう少し長く引用してみましよう。

なお『娥歌かるた』は『平家物語』に見られる横笛と滝口入道の悲恋を下敷きにしたもので、延宝四年の山本角大夫正本

『よこぶゑたき口恋之道心』を改作したものとされています。ただしかるた取りの場面は原著になく、増補されたものに見えるので、このかるた取りを延宝まで遡らせることはできそうもありません。

## 二

## 中宮歌がるた

夕ざれや、く、時雨まじりの、はつあられ、お庭のこずゑ  
 おちばして、菊もうつろふ御つれづれ、中宮の御遊び、双六は  
 さいの目の、心に合ぬもねたましく、へんつきはむつかしし、  
 貝おほひは手もつめたし、いざついまつの歌がるたいかがあら  
 んとの給へば、げににぎやか成お慰み、はやはじめんと、わか  
 き女中の座をくみて、手箱のふたをとりどりに、もじに目じる  
 しのめけば、よこぶゑはあけくれにつまの恋しさ身のつらさ、  
 思ひにしづみ思ひくれ、ならぶるうたの下の句の、我衣手とも  
 るともに、ぬれつつ袖のみやづかへ、もるる涙ぞふびん成ル。  
 中宮あはれに思召せ共、それとはさしての給はず。なふ人々、  
 歌がるたはつねのこと、ただとつては珍しからず。少心人有故  
 にみづからはとらずして、上の句を出すべし。いづれもずい分

あはせてとれ。其歌の心にて、めんめん其身のねがひごとかな  
 ふかかなはぬか、住吉玉津島に立願かけ、御くじの心のつい松  
 ぞや、サア上の句よむぞ、蟬丸、これや此、行も帰るもわかれ  
 ては、是は横笛にとらせたい、人にとらすな、ずいぶん目を  
 きかせよ。誠に此下の句は、しるもしらぬもあふ坂のせき、わ  
 かれし人にあふ歌、此よこぶゑがねがひぞと、心にたのしみ目  
 をくばるまに、おこし本の小桜が、こざかしげに小さし出て、  
 これこれここにと合せて取こそほいなけれ。サア藤原のさねか  
 たのあそん、かくとだに、えやはいふきのさしも草、コレさし  
 もしなじな、もゆる思ひはと、合せとつたる十六夜が、心のね  
 がひは、あすかあさつておいとま申、やひとすへんと存ぜしに、  
 いぶきもぐさの諸願成就と悦べば、サアいせたいふ、いにしへ  
 の、ならの都の八重ざくら、これはめでたい下の句次第に、花  
 の色をまし、けふ九重にほふとは、末にねがひのかなふ歌、  
 それよこぶゑ、あいと云、あにまんがちのをしあひ、せり合、  
 うこんが取て嬉しや此くれの、きぬくばりのおしきせを、いく  
 へもいくへも七重八重九重とのねがひぞや、コレ大中臣よしの  
 ぶのあそん、御かきもりゑじのたく火よるはもえて、せめて一  
 首とよこぶゑが、たまたまとつたる下の句も今のうき身にぎん

ずれば、ひるはきへつつ物をこそ、思へば我に思へかや、サア  
右大将道綱の母、なげきつつひとり、ぬるよの、あくるまは、  
つづけて是も横笛が、合せて取し、下の句の、いかに久しき物  
とかは、其身ならずはしる人もよも有まじと涙ぐむ、是こそ前

大僧上行尊、もろともに、あはれとおもへ、山ざくら此下の句  
はみづからが、すぐに合せてとるぞとて、花より外にする人も、  
なしとないひそ、もろ共に、あはれをしるはみづからよ、やよ  
横笛とかほばせを、つくづくと御らん有ければ、うさもわする  
る忝さ、いとど涙のたねならし。サアはやいそいでとれ、かき  
の本の人丸、あしびきの、山鳥のおのしだりおの、ハアとつて  
つらいはいつ迄か、ながながし夜をひとりねせふか、サア謙徳  
公、あはれともいふべき人はおもほへで、下の句とつたは小は  
ぎか、まだ十三や十四で身のいたづらになるまいぞ。中なごん  
家持、かささぎのわたせる、はしにをく霜の、下の句とつたる  
小侍従がなむ三ばう、毎夜毎夜のおよづめがねぶたいに、しろ  
きを見れば情けない、また夜がふけふと打笑ふ、サア崇徳院、  
せをはやみ、いはにせかるる、たきがはの、たきと云字もおも  
しろし、いはがんせきにせかれても、われても末にあふ下の句  
とつたる者は諸願成就、あれが見へぬかあれあれと、よこぶえ

に御目をかはし御かほにてをしへ給へば、よこぶえとび立嬉し  
さの、女中をしりけ及びごし、サアとつたせかるるたきとよこ  
ぶえと、われても末にあふよとて、だいて悦ぶ歌がるた、おほ  
しめしやる中宮もともに興にぞ入給ふ。

〔近松全集第八卷〕岩波書店695頁〜699頁

### 三

結局、ここでは十首の歌が読みあげられています。今のとこ  
ろ、これだけたくさん歌が出てくる資料は珍しいと思われま  
す。ついでにここに「ついまつの歌がるた」とあることに留意  
しておきましょう。「ついまつ」も「歌がるた」も同じ意味で  
す。「ついまつ」は松明のことですが、『伊勢物語』六十九段の  
故事を踏まえることで、上の句と下の句が合せられる歌がるた  
の別称とされています。

「中宮は「みづからはとらず」といって、ここでは読み手に徹  
しています。貴族本来のやり方であれば、身分の高い中宮は読  
み手にならず、女房の誰かに読ませるはずです。またここで気  
付くのは、中宮が上の句札を詠みあげる際、「蟬丸、これや此」  
などとすべて作者名から読んでいることです（現在は歌のみ）。

そのことは「天智天嫁おつとよしおつとよし」という川柳からも窺われます。

また合わせ取るというのがわかりにくいものの、上の句に合う下の句札を取るに際して、読み手は下の句を読みあげず、見つけた人が下の句を読みあげて取っているようにも思えます。こういった間接資料によって、十八世紀初頭には間違いなく読み手が確立していたこと、読み手は作者名も詠みあげていたことがわかります。

なお中宮であれば、高価な肉筆かるたでも良かったのですが、女房達と恒常的にかかるた取りをやるとなると、安価な版彩色かるたの方がいいかもしれません。いずれにしても版彩色の登場によって、大衆化に拍車がかけられました。その大衆化と時を同じくして、「読み手」の存在もクローズアップされたわけです。それ以前は、単に見て楽しむか、暗記カード的に用いたか、あるいは貝覆い風の遊び方を踏襲していたのかもしれませんが。

このように遊戯者とは別に読み手が要請されると、必然的に札の並べ方にも影響が生じてきます。それ以前は貝覆い式に中心に上の句札が表向きに重ねて置かれ、その周囲に円形に下の

句札が置かれていました。中央に置かれた一番上にある歌の下の句札を場から探すわけです。

もつとも、本当にそのようにして遊んでいたのかどうか定かではありません。しかし読み手が登場すると、上の句札は読み手の前に置かれることで読み札へと変容します。それに連動して下の句札は取札となり、方形に整然と並べられたり散らされたりしました。上下二枚の札は分離されてしまったので、もはや札自体を合わせ取ることはできなくなりました。というより読み札は、歌を読み上げるだけの機能しかなくなったのです。ですから初期の競技かるたでは、読み札にある歌仙絵さえも排除しました。ここにおいて、もはやトランプ系のカルタとは大きく隔たった、日本独自のかるた遊びとなったといえそうです。

## ②『福びき集』に見る明治三十年代のかかるたの実情

### 一

明治三十三年刊の『福びき集 附つげかるた法』(内外遊戯全書第十四編・博文館)には、附録として四十頁近い「うたかる

た必勝談」が付いています（表紙と相違あり）。目次の見出しをあげると、

覚え方

並べ方

見方

取り方

かるた会に就ひて

となつています。「並べ方」を見ると、「次は、さ、す、せ、ふ、ほ、む、めで各々一枚である。」と、初めて一字決まりに言及しています。また「かるた会に就ひて」の中には下の句かるたの貴重な証言もあつて、本書は資料として看過できない貴重なものであることがわかりました。

これは東京かるた会が設立される数年前に出た本ですが、すでにかなり競技かるたに近い取り方をしていることが察せられます。こんな貴重な資料ですが、かるた関係者はほとんど目にしたことがないようなので、特に重要な「かるた会に就ひて」の全文を紹介することにします。これを読めば、当時のかるた競技の実情がわかるのではないのでしょうか。

## 二

かるた会に就ひて

空気の流通悪しき室に長く多人数集合するは、衛生上不可なるのみならず、脳や眼を疲すことが実に劇しいからである。又それのみならず、一定の時間外を遊戯の爲めに更かすと云ふ事は、自修の点から見ても決して良くない行であると思ふ。依つて自分は後くも午後十二時には散会するやうにと望むので別けて婦人は此の時間内には已でに己れの家に帰つて心安く眠つて居るやうにと望むのである。と云つて十二時の鐘が鳴つたと云ふので、早速何卒ぞお帰りください。とも云へないから、始め招待状を差出す時に尚々書として。追伸御来席の遅速に拘らず正十二時を以て散会致す可き筈に候間右悪しからず御含み置き被下度く存じ候と記すも亦取締上の一法かと思ふ。負けた者に墨や白粉を塗つて、私に其の感奮を望むのは至極良策かと思はれる。それで白粉に少許の紅を混ぜたのを塗ると、恰度碧血淋漓たりと云ふ有様で、又、それに少量の墨を混ぜたのを塗ると、恰も刀痕癒へずして旧瘡尚面に在りと云ふおもむを呈する。茲に塗手の注意すべきは、凡て毛の生へてゐる

所を避けることで、殊に婦人の生え際などは最も注意して避けねばならぬ。

何処どこのかるた会に往つても不快を感じるのは、組を分ける人の定おさまら無いのと、読手が躍起となつて読み上ぐるにも拘らず、其の札を取つたのやら取らぬのやら、一向分明せぬ事である。前者は会主の罪であるが後者は全く取手の罪で(中には読手にもあるが)即ち札を取ると共にはいと、読手に応こたへないからである。

徐々そろそろ一同が疲れて来た頃になると、茶菓子を出して勇氣を挽回させるが、これはまた必要な事である。ではあるが、寿司や酒もし若くは殊更調理したものなど出すは絶対的に不可で、斯か様の場合は、蜜柑と塩煎餅に茶で十分である。

かるた会に用ゆる灯火は吊洋灯つりあんがに(電気灯、瓦斯灯がすと等なれば更に能よいが)限るやうである。

上の句から読むで下の句を取ると、下の句を読むで下の句を取ると何れか良きやと云ふ問題は、夙むとは斯道ししどうの熱心家間の論議する所で、共に優劣なく一寸判断しかねるが、或は後者の方が能よいかとも思ふそれは反間苦肉の策を施す余地あそが無いので、比較的平等の素養を以て闘うからである。

読手は取り方の上手な、声の明瞭はつきりした人に頼むが得策である。そこで龍田の川をりゆうでんせん、とやまをぐわいさん若くはゑんざん、けふ九重をけふきゆうてうと変へて読むのは未だ想すべしをしと為ても、山の奥にも鹿ぞ啼くなるを、山で奥さん鹿に喰れた、とか、或は乙女の姿しばしとどめむ、を聴くに堪へざる卑句にもちつて得々たるに至つては、抑おそも何の心ぞやと嘆じたくなる。

己の旗色が悪くなつて来ると一枚二枚膝の下に押し隠して素知らぬ顔の卑怯者があるが、自分の党なまでは是等の手段を切支丹バテレンの術と唱へ、実に蛇蝎視するのである。云ふまでも無いことだが、其の勝つと負けるとを問はず、須すべく潔いさぎよく有りたい。然しか矣、恰も紫宸殿の階下に伏して。勝敗は戦たたかひの常にして実に時の運なり。と奏上した楠河内守正成公の如き、覚悟あらむことを偏ひとへに望むのである。

そこで老婆心として特に一言して置くことがある。それは余の義でもないが、総て加留多は出来能できあたふ限り静肅に為るやうにとの注意、否寧ろ勸告である。昔は知らず、今加留多を為すもの、多くは全く其の勝敗を腕力で定めると云ふ有様で、血氣に逸はやる若殿原は申すまでも無く、中には随分妙齡せうめの女でさえ、此の

時ばかりは有ら被れもなく雪脛露に紅裙を翻へし、キヤツキヤツと喚くは三本毛の足らぬ猿にも劣らぬ体裁。やれ指を痛めたの、やれ髪を揉られたの、といやもう狼藉と云はうか、殺伐と云はうか、実に沙汰の限である。偶々一座の中に事理の明った人があつて。些とお静に。とでも云はうものなら。腐つたお姫様じやあるまいし、あの一寸今彼の方がお説なすつたは此れでしやうか。応。それでは、貴嬢此札をお取りなさいましな。私が其札を取ると、貴嬢損をしてよ。何有、能いじやありませんかお友達の仲ですもの、損の徳のつて商売人染みたことを仰有らずに。でも貴嬢でも貴嬢と。只一枚の札にさえ斯様謙遜仕合つて因循した果が、終局の勝負を無視する様に至つては、抑々何の処に其の愉快を求め得られやう。須く腕を振して尻を捻り、齒を露いて顔に食ひつく底に、遣る可しく大活発に遣る可しである。との抗弁で躊躇して居やうものなら。我々の行為を免や角難ずるやうな柔弱の不所存者は用捨なく摘み出すから左様心得べし。と手も附けられぬ怪氣焰満更ら是等の連合を見受けないでも無い。そこで自分は寧ろ迂に近きまで相譲つてまでも腕を振して尻を捻り齒を露いて顔に食らひつくの活発?を甚だ厭うのである。然矣、大いに是等の活発を避

けるやうにと望むのである。左様無暗矢鱈に大活発がりたければ、男子は宜しく寒中赤条褌々となつて往來の中央に直立ち。遠ふからん者は、さこそ音にも聞つらむ、斯く云ふ我こそは当代野見なるぞや、太麻と思はん人々は近く寄つて脛の毛の塵となれツ。と吐鳴り廻して散々白痴を尽した上句、拳法でも修して内乱を起し、第一発の弾丸に千秋の恨みを呑むで斃れるのも、亦丈夫の業たる一快事ではあるまいか。又女子に在つては、帝国議院でも借り受けて万国女子大演説会を開き、女尊男卑論を闡はして難なく原案を可決せしめ、其の返るさは目今流行の自転車に乗つて走り廻したばかりでは興薄きに似て居るから、そんなよ其辺の溝に落ちて其儘目出度く往生したまいなば、其の死や実に娘を子に持つ親を戒むるばかりでも余榮ありと云べく、十千年の後に嗚呼女傑蝦茶式部の墓と、崇め称へらるるは必定である。然るに何も苦しむで六畳敷乃至十畳敷の小室に蟠居つて、恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ、でも有るまいでも無いか。呵々。それは偕措き要するに、加留多の勝負は腕力に非らずして実に伎倆に在るのである。若し夫れを腕力とのみ思ふのは、正に誤解である!。それで又、伎倆を蔑らにするのは確に其興を穫取する資格無いものである。更に極言すれば、

これ等の総ては実に加留多の敵であるのだ。我が東京帝国大学の一部の人々が組織して居る某倶楽部といふ加留多の団結の如きは実に熱心家の寄合で、毎月二三回年を進して遣つて居るが、殊に土用中赤条袴々になつて頻りに勝負を争つて居る有様は、実に滑稽至極である、が、風俗の甚だ穩かならぬにも拘らず而も其の仕方には自ら秩序があつて指一つ障つたとなれば、設令目の前に在つても他から犯し取るやうな無作法は、寧ろ愧べきこととして必ず為ぬのである。況むや、腕を扼して尻を捻り齒を露いて顔に食いつくの事をや。これ等は紀元前の仕方として冷笑ふのである。前陳の次第であるから例の毛三本足りぬ連中が見て居つたら。あ、潺弱座に堪へずと慷慨悲憤の涙に暮れるであらうが、自分等の眼を以てすると、正に斯くあるべき筈で、其の手際の美事さは局外者ですら実に胸が清くやうに覚える。それも其の筈、現在取られた人すら嘆賞するのであるから、当節は閑散無聊の名聞家が多いので、頼まれも為ぬ議論沙汰に口角泡を飛ばすやうであるが、思ひきや、其の飛沫は何時か加留多の上にもはねて、ヤツサモツサの果が教育上どうののかうのとは、何処まで逆上させたまふことやら、お蔭を以て瘋癲病院は事務拡張誠に目出度う候ひけるだ。何しろ是等の論

客は自己の愛憎心を標準として説くのであるから、更らに何の價が無いのみでなく。驕ては教育のキ印に因める所以である。何は然れ強ひて此の是非を究めたくば、最も真面目に最も丁寧且つ十分責任を帯びて、而して堂々と意のある所を忌憚なく述べて慾しひのである。彼の匿名で出放題を端書に記して、よがつて居るやうな輩は、殆ど酒を飲みながら、如何もアルコールは有害でと説ひたり。眞を燻しながら、如何もネコチンは健康を傷うと説くやうなもので、偶々自己の所信なきを表す次第である。自信の念なき者の口から出たことを、設令法界節に貸す耳は持つとも、如何して聴ひて居られやう。これ等は論外としても随分中には知名の先生方すら半分云ひかけて左顧右視した上句、何に感ぜられてか口を拭うて知らぬ顔の半兵衛さんと、余り聞へぬ仕方と云はざるを得ない。自分は今遽かに何れとも断言しないが、斯く其の仕方を公言して毫も憚らぬのを見ても賛否の何れであるかは瞭然として火を賭るより明であらうと信ずる。

(終)

## 三

以上、単なる早取法ではなく、当時のかるた取りを踏まえて



の指摘なので、この文章から当時のかるた取りの現状を垣間見ることが出来ます。ただし後半はかるた会から離れており、何が言いたいのかわからなくなっています。

本書の著者は奥書に安藤兼吉とありますが、弁護士・政治家でしょうか。そもそもかるた取りの知識をどのように仕入れたのかなどは読み取れません。

### ③石川啄木『鳥影』

石川啄木の『鳥影』（東京日日新聞・明治41年）にも、かるた会のが描写されているので、その個所をあげておきます。

#### 其四

#### 四

「あら、貴女のお迎ひに来たのよ。今夜アノ、宅で加留多会を  
行りますから母が何卒どうぞッて。…被来いらっしるわね？」

「歌留多、私取れなくつてよ」〈中略〉

#### 五

聽きて信吾の書齋しやうさいにしてゐた離室はなれに、歌留多の札はが撒かれた。明るい五分心の吊洋灯つるしやうとう二つの下に、入交りに男女の頭が両方から突合つて、其下を白い手や黒い手が飛ぶ。行儀よく並んだ札が見る間に減つて、開放した室が刻々に蒸熱じやうねつくなつた。智恵子の前に一枚、富江の前に一枚：頬と頬が触れる許りに頭が集る。「春の夜の——」と山内が妙に氣取つた節で読上げると、「万

歳ツ。」と富江が金切声で叫んだ。智恵子の札が手際よく抜かれて、第一戦は富江方の勝に帰した。智恵子、信吾、沼田、慎次、清子の顔には白粉が塗られた。信吾の片髭かみげが白くなつたのを指さして、富江は声を限り笑つた。一同もそれに和した。沼田は片肌を脱ぎ、森川は立襟の洋服の釦ボタンを脱して風を入れ乍ら、乾き掛つた白粉で皮膚が痙攣ひきつる様なのを氣にして、顔を妙にモグモグさしたので、一同は又笑つた。

「今度は復讐ふくしやうしませう。」と信吾が言つた。

「ホホホ」と智恵子は唯笑つた。

「新しく組を分けるんですよ。」と、富江は誰に言ふでもなく言つて、急いそしく札を切る。

## 六

二度目の合戦が始つて間もなくであつた。静子の前の「ただ有明」の札に、対合つた昌作の手と静子の手と、殆ど同時に落ちた。此方が先だ、否、此の方が早いと、他の者まで面白づくで騒ぐ。

「敗けてお遣りよ。昌作さんが可哀想だから。」と見物してゐたお柳が、嘴くちばしを容れた。不快な顔をして昌作は手を引いた。静子は気の毒になつて、無言で昌作の札を一枚自分の方へ取つた。昌作はそれを邪慳に奪ひ返した。其合戦が済むと、昌作は無理に望んで読手になつた。そして致頭終ひまで読手で通した。

何と言つても信吾が一番上手であつた。上の句の頭字を五十音順に列べた其配列法が、最初少からず富江の怨みを買つた。しかし富江も中々信吾に劣らなかつた。そして組を分ける毎に、信吾と敵になるのを喜んだ。二人の戦ひは随分目覚しかつた。

信吾に限らず、男といふ男は、皆富江の敏捷すばしこい攻撃を蒙つた。富江は一人で噪なぎ切つて遠慮もなく相手の札を抜く、其抜方が少し汚なくて、五回六回と続くうちに、指に紙片で繃帶ばんどうする者も出来た。そして富江は、一心になつて目前の札を守つてゐ

る山内に、隙さへあれば遠くからでも襲撃を加へることを怠らなかつた。其度、山内は上気した小さい顔を挙げて、眼を三角にして怨むが如く富江の顔を見る。「オホホホ。」と、富江は面白氣に笑ふ。静子と智恵子は幾度か目を見合せた。

一度、信吾は智恵子の札を抜いたが、汚なかつたと言つて遂に札を送らなかつた。次いで智恵子が信吾のを抜いた。

「イヤ、参りました。」と言つて、信吾は強ひて、一枚貰つた。其合戦の終りに、信吾と智恵子の前に一枚宛残つた。昌作は立つて来て覗いてゐたが、気合を計つて、

「千早ふる——」と叫んだ。それは智恵子の札で、信吾の敗となつた。

「マア此人は！」と、富江はしたたか昌作の背を平手で擲なしつめた。昌作は赤くなつた顔を勃ちとした様に口を失らした。

可哀想なは慎次で、四五枚の札も守り切れず、イザとなると可笑しい身振をして狼狽まごつく。それを面白がつたのは、嫂あよめの清子と静子であるが、其狼狽方が故意わざとらしくも見えた。滑稽でもあり気の毒でもあつたのは校長の進藤で、勝敗がつく毎に鯨髭くじらひげを捻つては、「年を老ると駄目です喃。」と脚こぼしてゐた。一度昌作に代つて読手になつたが、間違つたり吃つたりするので、二十

枚と読まぬうちに富江の抗議で罷めて了つた。(中略)

九時過ぎて済んだ。茶が出、菓子が出る。残りなく白粉の塗られた顔を、一同は互ひに笑つた。消さずに帰る事と誰やらが言出したが、智恵子清子静子の三人は何時の間にか洗つて来た。

石川啄木の作品では、なんだか明治四十一年にかかるたのことが集中して出ているように思えてなりません。

#### ④中勘助『銀の匙』

中勘助の代表作として著名な『銀の匙』の中に、百人一首に關する記述があります。あまり記憶に残っていないかもしれませんが、意外に長々と書かれていますので、その部分をここに抽出しておきます。資料的価値もありそうです。

### 十八

伯母さんはまた百人一首の歌をすっかりそらんじていて、床へはいつてから一流のものさびしい節をつけて一晩に一首二首

と根気よくおぼえさせた。伯母さんが

「たちわかれ」

という。私が「たちわかれ」

とあとをつく。

「いなばのやまの」

「いなばのやまの」

「みねにおうる」

「みねにおうる」

そんなにしていくうちにいつか寝入ってしまう。よくおぼえたときは

「あした御褒美をあげるにまあねるだよ」

といつて叩きつけてねせてくれる。私が歌をはやくおぼえるのをたいへんなえらい子でもあるかのように思つて伯母さんはあ明る日母などに

「ゆんべはふたあつもじつきにおぼえた」

なぞと自慢らしく話したりした。私はわからぬながらも歌のなかの知つてる言葉だけをとりあつめて臚げに一首の意味を想像し、それによみ声からくる感じをそえて深い感興を催していた。そのじぶん私は古い歌がるたをもつてたが、それには一枚のふ

だのなかに歌と歌にあわせた絵がかいてあって、けばだつて消えかかつてはいたけれどそれでも松に雪のふりつもつてるところや、紅葉のしたに鹿の立つてるところなどほんやりと見わけられた。また百人一首の綴じ本もあった。歌の好き嫌いはかるたの絵とよみ人の姿、顔かたちによつてもきめられる。好きな歌は末の松山の歌、淡路しまのうた、大江山の歌など。末の松山のうたは私の耳にいいしらぬやむらか柔なもののさびしい響きをつたえて、かるたの絵には松の浜に美しく波がよせていた。淡路島の歌は涙をさそう。海のうえを舟がゆき、千鳥が飛んでゆく。大江山の歌をきけばお姫様が鬼にとられてその山奥へつれられてゆく草双紙の話をおひださずにはいられなかつた。僧上遍昭や前大僧上行尊などといふ皺くちやの坊さんは大嫌いだつたが蝉丸だけは名まへからも可愛かつた。

〔銀の匙〕岩浪文庫44頁〕

ここには床に入つた後に歌を暗記するというやり方が記されています。また所有するかるたが通常のものではなく、歌意図入りであるというのも珍しいのではないでしょうか(むべ山かるた)の類かもしれません)。この中の「松に雪のふりつ

もつてるところ」というのは、坂上是則の「あさぼらけ」歌でしようか。こういつた記述は、かるたの資料としても非常に有益な情報です。特に大江山幻想というか、大江山の歌から鬼を連想(誤解)している点など、享受史としても面白いし貴重です。

#### ⑤豊島与志雄「運命のままに」

豊島与志雄の「運命のままに」(太陽通信社黒潮一―二・大正五年十二月)にかるた取りの記事があつたので、その部分を抜き出しておきます。

## 二

年が明けて、都会は賑やかな忙躁の巷となつた。年始の客や、羽子の音や、夜には歌留多の声が響いた。暢ややかなものが翼を拡げて人々の心が晴やかに輝いていた。然しその外界の快活が却つて私の心を重苦しく圧えつけた。私は一人下宿に閉じ籠つていた。

三日に私は英子の家を訪れた。

「おや、どうして被入らなかつたのです。」

斯ういつて喜ばしく私を迎えてくれたのは英子の母であつた。

私は其処で初めて静かな家庭の屠蘇と雑煮との馳走になつた。

英子は妙に真面目くさつた顔をしていたが、それでも晴やかな心がその言葉に現われていた。

「私昨日は方々お友達のを廻つてすっかり疲れてしまつたの。」

「私の所へはどうして来なかつたのですか？」と私は云つた。

「だってあなたの方から来て下さるのが本当だわ。それに下宿は私何だか行き悪いんですもの。」

それからまたこんなことを云つた。

「あしたの晩、うちで歌留多をやるの。あなたは是非被入らなくてはいけないわ。今お手紙を上げようと思つていた所なの。」

「ほんとうに是非被入して下さい。」と春子さんもいつた。「歌留多会などと云うんではありませんから。橋本さん御兄妹とうちばかりですから。あなたが被入らなければ人数が足りないいつて英子が大騒ぎをしていました所です。」

私はとも角も明晩来ると約束して程なく辞し去つた。英子が

また出かけると云つていたからである。そして私の愛がどうして浮々した英子の心を落ちつけることが出来ないかと、悲しい思いに満たされたからである。

私は四日の晩初めて静子の兄の欽一郎と英子の家で逢つた。

彼は静子によく似た顔立ちであつた。細面の眉の細い、そして金歯を時々笑顔の口元に光らしていた。長い髪が額に二三筋垂れ下るのを無雑作にかき上げる癖と、切れの長い眼を瞬く癖とを、私は見落とさなかつた。

「よく被入して下さいましたね。」と春子さんは私に云つた。

「あなたは歌留多が余り好きでないからどうかと思つて心配してしました。」

「いや元来の嫌いではないんですけれど、取れないからです。」

「それは私なんかも実際駄目ですよ。」と欽一郎は云つた。

「嘘よ、静子さんから聞いていますわ。」

英子はそう云つて眼で笑つた。

「いや本当に駄目です。…一体こんなことは女の方が男より早く上達するようですね。静子なんか元は丸で取れなかつたものですが。」

「それは初つからお上手な人はありませんわ。」

「所が英子さんなんかは生れつきお上手の方でしょう。」

「あら随分ひどいことを仰言るのね。」

「いや確かに天才肌の人も居ますよ。」

私は黙ってそんな会話をきいていた。そして静子の本当だか戯言じごうだだか分からないような話つぶりがその兄にも在るのを見て、不思議な気持ちを感じた。

歌留多が持ち出されると、私は取れないと云ってただ見物するのを主張したが、英子はどうしても私を許さなかった。

「静子さんはお上手だから私と橋本さんとでかかりましょう。あなたは静子さんの方の遊軍におなりなさいな。…お母さん読んで下さるわね。」

「それじゃ駄目だわ。」と静子は云ったが、私の方をちらと見た。英子は札を半分ばかり欽一郎のほうに持たした。「僕はこんなに沢山は駄目ですよ。」と彼は云ったが、英子はそれを無理に押し付けてしまった。

「また英子さんのチラニーが初まった。」と彼は笑っていた。

勝負は丁度合っていた、と云うより寧ろ誰も真剣になつていなかったという方が正当であつたかも知れない。

私は僅かの札数を持って、勝負よりも寧ろ春子さんの美声を

楽しんでいた。彼女は英子の何処か濁りのある声とは似ても似つかぬ美しい声を持っていた。読札を電燈の光りにかざしながら、少し小首を傾けて何時までも疲れない澄んだ声で読み続けた。それから私はまた静子の思つたより巧みなのに驚いた。

いい加減に疲れた頃私達は歌留多を止よした。そして皆で菓子や蜜柑をつまみながらまた会話を続けた。英子は始終欽一郎を上からお被せるような口の利き方をした。そして私の耳には「また英子さんのチラニーが初まった。」という男の声が残っていた。

英子の家から出たのは十一時近くであつた。私は橋本兄妹と連れ立って淋しい通りを神楽坂まで歩いて来た。

「そのうち私共のうちで歌留多会をやりますから、是非いらして下さい。」と欽一郎は私に云った。

「え有難う。」と私は答えた。

「ああいう遊びは呑気にやっている、やりにいいですね。」  
「ええ。」

特に資料的価値のあるものではありませんが、これこそ当時の一般的な正月のかるた取りの風景ではないでしょうか。

## ⑥海野十三著「千早館の迷路」

「千早館の迷路」は、SF作家海野十三が昭和二十二年に雑誌「ロック」に発表した短編です。そのタイトルの「千早」に注目して中を調べたところ、案の定、業平の「ちはやふる」歌が推理のキーワードに用いられていました。落語と同程度のこじつけですが、取り合えず享受作品として押さえておきます。

中心となる部分は探偵・帆村莊六の謎解きの中で次のように描かれています。

「いいですか。ここは千早館でしょう」

「ええ、そうです」

「千早ふる神代も聞かず龍田川——知っていますね。小倉百人一首にある有名な歌です。その下の句に、からくれないに水くぐるとはとあるではありませんか。からくれないとは、正面奥の、あの真赤に塗った壁です。水くぐるとはこの水族館です。左右の金魚槽の間を脱けて奥へ進めば、水くぐるです。最後の「とは」はすなわち「戸は」です。正面に見えているのは「戸ら」だから、その隣りに「戸は」がある筈です。その「戸は」

を開け——というのがこのところに集められた謎の解答なんです。」

たったこれだけです。面白いことにこの小説では推理の都合上、「くぐる」ではなく「くぐる」が用いられています。

## ⑦薄田泣菫「無学なお月様」

薄田泣菫の書いた「無学なお月様」という作品の中に、阿倍仲麿の歌が引用されていたので、その部分を抜き出しておきます。

すると、いつの間にか黛くろずんだ春日の杜にのっそりと大きな月があがつてゐた。「や、月が出てゐる。ちやうど十五夜だな。」と、立ちどまって珈琲皿のやうにまん円く、おまけに珈琲皿のやうに冷たいお月様を見てゐるうち、野尻氏は何だか歌よみらしい気になった。

野尻氏はチウイング・ガムを噛むだ折のやうに、口のなかか

ら変な三十一文字を吐き出した。

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

いい歌だ、いい歌が出来たものだと思つて、今一度よみかへしてみると、それは自分の歌ではなく、百人一首に出てゐる名高い安部仲麿の作だつた。

野尻氏はその歌を繰り返しながら、じつと空を見てゐると、肝心の珈琲皿のやうなお月様が三笠の山の上に出てゐない事に気がついた。

「をかしいね。三笠の山に出でし月かもといふからには、ちゃんと三笠山のでっぺんに出なければならぬ筈ぢやないか。それにあんな方角から出るなんて。」

実際野尻氏の立つてゐる所から見ると、月は飛んでもない方角から出てゐた。三笠山は何か後暗い事でもしたやうに黛ずんだ春日の杜影に円い頭を窄めて引つ込んでゐた。

それから後といふもの、野尻氏は公園をぶらつく度に、方々から頻りと月の出を調べてみたが、無学なお月様は、仲麿の歌なぞに頓着なく、いつも外つ側から珈琲皿のやうな円い顔をによつきりと覗けた。

「やつぱり間違だ。仲麿め、いい加減な茶羅つぼこを言つたの

だな。」

野尻氏は自分のやうな眼はしの利く批評家に出会つたら、仲麿もみじめなものだと思つて得意さうに微笑した。そして会ふ人ごとにそれを話した。すると大抵の人は「なる程な。」と言つて感心したやうに首を傾げた。

泣菫は奈良公園を歩き回つて、三笠山の上に月が出ないことを発見(確認)したと述べています。それが本当なら、仲麿はどこから見た月を詠じたのでしょうか。もつとも仲麿の歌は中国で詠まれたものですが。

#### ⑧ 小川未明「つじうら売りのおばあさん」

小川未明の童話「つじうら売りのおばあさん」の中にもかるた取りの光景が描かれていたので、その部分をあげておきます。

ある日、雪のはれた晩がたでした。

「きょう、義雄さんの家のカルタ会だ。」というので、みんなは



喜んでいました。

達夫くんは、おとなりのかね子さんをさそって、いくことになつていました。

入り日が、赤く雲をそめて西にしますと、雪のつもつた山のかげがまっ黒になつて見えました。いよいよ出かける時分には、雪の上がおつて、歩くとさらさらと音がしたのです。

「このあいだ、僕の家のカルタ会でお顔に、すみをぬられなかつたのは、かね子さん一人だけだろう。かね子さんは、えらいな。」と、達夫くんは今夜また負けて、おしろいやすみをぬられるのかと思うと、なんだか自分はいつも負けて、はずかしい気もちがしました。

「達夫さん、私と組みになりましょうね。私ひとりでたくさん取るからいいわ。あなたは自分の前だけよく見ていらつしやいね。」と、かね子さんはいいました。

しかし、達夫くんは女なんかからかばわれるのを、名譽とは思わなかつたのです。

「僕、カルタに負けるけど、すもうを取ればいちばん強いんだがなあ。」と、歩きながら達夫くんは力みました。

その晩のカルタ会は、なかなかにぎやかだつたのです。カル

タにつかれた時分、おすしや、あまぎけや、みかんや、お菓子などが出ました。それを食べてからあとは、火鉢をかこんでお話の花がさいたのであります。(中略)

「いちばんカルタに負けた人が、出て買うことにしよう。」と勇二くんがいました。

「だれだろう?」と、みんなはおたがいの顔を見まわしました。

そして、いちばん、すみやおしろいの多くついている顔を、さがし出そうとしました。

「ああ、達夫くんだ。」と女の子の一人がさげぶと、

「達夫くんだ!」と、口々にいって、いちばんすみやおしろいのたくさんついているのは、達夫くんにきまつたのです。

題名の「つじうら売り」はもはや死語になつていようです。本来の辻占は占いの一種ですが、この場合はおみくじのようなものを売り歩いていたと思われまふ。かるたの負けわざ(罰ゲーム)として、「つじうら」を買いに行かされているところが面白いですね。

⑨坪内逍遙「十歳以前に読んだ本」

⑩正岡子規『わが幼児の美感』

坪内逍遙が幼少の頃の思い出を書いた「十歳以前に読んだ本——明治四五年六月『少年世界』の為に——」の中に、百人一首のことが出ていました。短いですがその部分をあげておきます。

近代俳句を確立した正岡子規の『わが幼児の美感』には、百人一首かるたの思い出が語られています。

それから『百人一首』。これは古風な大型本で、画は西川派風であつたと記憶する。多分五六歳頃の最愛玩書であつたらう。山辺の赤人でも、柿本の丸でも、坊さんでも、女でも、其頃は目か鼻か口元か烏帽子の尖か衣裳の端かを見せられれば、直ちに其名を指し得る程に目覚えがあつた。

ある年東京へ行く某の叔父に歌がるたを頼みけるに疾く送りこされぬ。そのかるた善き品にて、我家には過ぎたりと人皆のいへりしが、そのかるたいたく我が気に入りて年々の正月を待ち兼ねたり。相手なき時は自ら読み自ら取りて楽みとす。曾根好忠の赤き扇は中にもうつくしく感ぜられて今に得忘れず。

(ほととぎす・明治31年12月)

逍遙の見た大型絵本とは何だったのでしょうか。可能性としては、勝川春章の『錦百人一首あづま織』かもしれません。それにしても歌仙絵の一部を見ただけで、それが誰か分かるというのですから、たいしたものですね。

ここで曾根好忠の歌仙絵には赤い扇が描かれていたとありますが、嵯峨嵐山文華館所蔵の古いかるたにも赤い扇が描かれています。

なお正岡子規は「歌よみに与ふる書」で『古今集』（百人一首の歌が二十四首含まれる）はくだらぬ集と徹底的に批判していますが、かるたは好きだったようですね。

⑪「坊主めくり」の遊び方——証言その1

愛媛県宇和島にお住まいの和氣寛治さんより「坊主めくり」の貴重な報告をいただきました。和氣さんは全日本かるた協会の重鎮で、名人位戦の読手を長く務められた方です。私が前に「坊主めくり」をご存知ですか?」の中で、ローカル・ルールが多いと書きましたが、その好例になりそうです。貴重な証言をありがとうございます。

私達が遊んでいるのは、「蟬丸」は嫌われる札で「近所迷惑」と言われ、その札を抜いた人の両隣の人も、中央の場に札を出さなければならぬとしています。

そして「清少納言」の札が出れば、全員の札、及び中央の札もすべてもらえることにしています。

その他、縹緗縁の畳に座っている男性の札を出せば、右隣の人の札がもらえ、縹緗縁の女性の札を出せば、左隣の人の札をもらえる等、子供達は適当に面白いルールを作って遊んでいます。

これを見ると、蟬丸札がマイナス要素に働いていることがわかります。また清少納言が蟬丸のプラス要素を継承しているようです。縹緗縁についても、男性か女性かで役割が違っているというのも初耳でした。

面白いルールで遊んだ経験のある方は、是非情報をお寄せ下さい。お待ちしております。

⑫「坊主めくり」の遊び方——証言その2

勤務校の授業で、百人一首かるたについて受講生に自由に書いてもらったところ、一年生の西條未来さんが坊主めくりのローカル・ルールについて書いてくれたので、それを紹介します。

坊主めくりの中でずっと気になっていたのが、しましまの畳である。それが天皇だけが座れる畳だったとは今日初めて知った。それを知らなくても、それらは特別な札で、「だんじき」というルールに用いていた。それらの札が出ると、札をめくつ

た人が他の人の札を奪いに行くことができるチャンスが発生する。他の人は持ち札を取られないように手で隠す。つまりはただのスピード勝負だが、平坦な坊主めくりをスリリングな争いに変えるので好きだった。不思議なのはそのルールを知っている人があまりいないことと、その名前が「だんじき」であることだ。どこか一部の地方だけで流行ったのか、それとも何か別の名前がなまって「だんじき」になったのか、今日まで特に調べることもなくしてしまったので、改めて調べてみようと思う。

これは纏縄縁置が役札になっているものですが、それもバリエーションがあつて、天智天皇と持統天皇の二枚だけがオールマイティになっているルールもあれば、天皇以外でも纏縄縁でさえあれば役札になっているルールもあるようです、

「だんじき」という名前は、実は「台付き」あるいは「段付き」から変化したものでしょう。「台」とか「段」というのが纏縄縁の畳を指しているのです。

スピード競技という点、纏縄縁を引いた人は、急いで他の人が取った札に触れば自分のものになるというルールがあります。また他人の膝を触るというルールもあるようです。いずれにし

ても総合的な調査が必要ですね。

### ⑬アーサー・ウェリー『日本の詩歌——うた』

(二九一九年刊)

『源氏物語』の英訳で有名なアーサー・ウェリーは百人一首の価値を一切認めていなかったようです。そのことは『日本の詩歌——うた』の序文にある次のような記述でわかります。

日本の詩歌がイギリスの読者に知られているのは『百人一首』という詞華集の英訳によるのが主なものである。『百人の詩人による百の詩』というこの選集は一二三五年頃つくられた。ここに選ばれている詩は日本の詩歌の最も面白い特徴を展示するためのようだ。あらゆる種類の技巧にみちており、このような歌を選んで『百人一首』を編集した藤原定家の趣味をほとんど信用するわけにはゆかない。これらの詩は価値もないのに分に過ぎた待遇を受けて日本人の間で広く読まれている。それはひとえに『幸福な家庭』のトランプゲームに使われている

という事実によるものだ。

もちろん原文は英語なので、川村ハツエ氏の『TANKAの魅力』（七月堂）の日本語訳から引用させていただきました。ここでウェリーは百人一首を和歌の技巧の見本市に喩えています。それは一面では正しい判断だと思います。また百人一首がかかるた（トランプゲーム）として広まっているという指摘も

核心を突いています。

ここにある英訳ですが、イギリスのF・V・デイキンスは一八六五年に最初の百人一首の英訳を紹介しており、イギリスではそれが最初に紹介された日本文学だと思われず、『源氏物語』よりずっと早くに紹介されていたのが気に入らなかったのかもしれない。